

内弟子体験について otto・ラム



小林道場への滞在が、一週間というのはいかに短すぎます。それでも、小林道場に親しい皆さんなら、そんな不平を言う人などいないでしょう。

小林道場ファミリーの中に入り、日本の伝統的な内弟子制度を体験をさせてもらえることは、今日では非日常的で特別なことです。内弟子としての稽古に加え、厳しい日々の雑用や責務を体験するということは、稽古だけの生活より、さらに集中力を高めることができます。道場の稽古の方法、礼儀作法、道場生、そしてもちろん合気道には小林先生の精神が満ち溢れています。

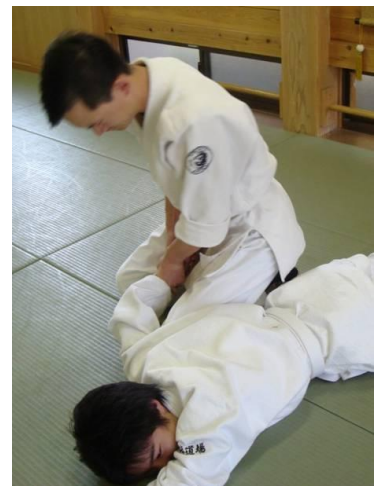
合気道に真剣な人なら、誰しもできるだけ近くで、できるだけ多くを先生から学ぶことが重要です。内弟子は皆、先生の稽古の仕方を真似て稽古をするということが、その道がどんなに遠くても、それが正しい道であると考えています。

内弟子のライフスタイルは多くの点で全く奥の深いものです。一所懸命な姿勢の無い人は、どんなに猛稽古を積み重ねたとしても、日々の生活がただの繰り返しにすぎなくなってしまいます。より上達しようと努力する人が、技のコツをつかめるのだと思います。

内弟子は初めてではないので、短い滞在でも生活スタイルにはすぐに慣れ、無駄なく有効に過ごす事ができました。それゆえ先生や一般の道場生によって繰り返される合気道そのものに焦点を絞れました。

内弟子生活というものは、苦しいものでも困難なものでもなく、単に様式の違いです。もし日々をこの様式、つまり、早起き、自己充足、清潔、猛稽古、他への気配りなど、小林道場の生活に合わせれば、自然と馴染んでくるものだと思います。

先生のクラスは、道場生があちこちに散らばりつねに満員で、技をかけたり受れたりするときは、否が応でも周りに注意を払うことになります。飛受身、後受身、前受身などの受身を取り、常にすぐに起き上がり、隙なく身構えることが重要です。このように混雑した稽古の中、しかも投げたり投げられたり、道場生が飛び交う中を、先生は油断ない佇まいであちこちに歩き回っています。投げられて立ってみると目の前に突然先生が現れ、次の受けや投げの相手をして頂いたのは、ごくあた



りまえのことでした。

先生と直接組むことで有段者の技はさらに磨きがかかり、白帯はそれぞれの力量に応じて先生の技が浸透していきます。いつも先生に組んでいただくというわけにはいきませんが、各々が技に磨きをかけ、常に意識して先生に近づきたいと思うようになるのではないのでしょうか。

伝統的な稽古で特筆すべきことの一つは、習慣です。初心者は初めてのことばかりですが、昔から連綿と続いてきたことです。小林道場の習慣の一つは稽古の後、皆で飲むお茶です。それぞれのクラスが終わると畳の上にピクニックのように大きなマットを広げ、お茶や甘いお菓子が出されます。こんな時先生は道場が見渡せる場所に腰をおろし、お茶を飲んだり、会話を軽く交わしたり、他の生徒の自主練習を見たりしています。道場生がお茶を飲んでいようが、先輩と話していようが、自主練習をしていようが先生を身近に感じるのは、先生がマットの端で全てを見渡し、監督しているからでしょう。それはまるで父親が窓越しから庭の子供を見守るようなものです。これは小林道場の稽古のもう一つの側面であり、家族の一員以上の気持ち、自主練習中も潜在意識に安心感や活力を与えてくれる支えとなっています。

深い感想を書くにはあまりに短い滞在でしたが、めったにない特別で貴重な機会を頂きました。それはまた翁先生の直弟子と直接お近づきになれるという経験でもありました。このような長い時を経たしっかりとした結びつきであるからこそ、奥深い伝統、技、合気道というものを連綿と伝えることができたのでしょう。

最も嬉しかったのは、稽古のあとの先生とのお茶の時間に古いアルバムを見せていただいたことです。それは本部道場で翁先生の内弟子をなさっていた頃の小林先生と、私のかつての師である金井先生の写真でした。素晴らしい家族の一員になれたような親近感を感じました。このように身近に感じられるようになったことは、とても幸運なことですし、このような機会を与えて下さった小林先生に心よりお礼申し上げます。

これから、より一層の稽古と一杯のお茶を楽しみに精進を続けたいと思います。

